

本学日本語表現のカリキュラムの構築と 授業における現状と課題

—2018年度、2019年度の学生のアンケートからの分析—

The Description and Teaching Methods of “Lecture about Japanese Expression
—The questionnaire Analysis of College Students, 2018 and 2019—

油谷 純子

(Sumiko YUTANI)

キーワード：日本語表現、語彙、読む・書く

Key Words：Japanese expression, vocabulary, Read・Write

I. はじめに

2012年に中央教育審議会から「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の答申が出された。この中で「これから目指すべき社会像と求められる能力」の中の「成熟社会において求められる能力」には「予測困難なこれからの時代をよりよく生きるための人間像」を培うための「学士課程答申」（2010年：中央教育審議会答申）の参考指針として、認知能力、論理的かつ社会的能力、創造力と構成力、教養・知識・経験の4つの力を育むこととしている。また、これらの力を持った人材の育成には学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）の転換の必要性を述べている。

目白学園のミッションは「育てて送り出す」であり、短期大学部では「育てて送り出す」を具現化するための「3つの力」（学び続ける力、実践する力、社会に役立てる力）を教育目標に定めている。

本学の学生に上述の力を育むには基礎教育科目のカリキュラム、それを具現化するシラバスの検討が必要となる。本学の教育プログラムはDPに連動し「育てて送り出す」を展開して体系的な編成とし、基礎教育科目、専門科目、ならびに各種資格の取得に関する科目から構成されている。基礎教育科目は、教養科目とキャリア形成科目から構成され、その目標は広範で多様な教養の涵養と基礎学力の向上を目指している。

「問題解決に向けて学び続けること」（短期大学部の3つの力の一つ）を支える力の習得には、教養科目に位置付けられ必修科目である「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」での学びがその中心的な役割を担い、この科目の充実こそ重要である。

以上の理由から基礎教育科目、専門科目の連携の見直し、また「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」の内容

を検討し、改善に向けて、本学教員 4 名¹⁾ のプロジェクトを立ち上げ検討し新しい内容を構築した。このプロジェクトの成果により2018年度から新シラバスでの授業を展開し、2018年度、2019年度の2か年の「日本語表現Ⅰ」受講学生の授業に対する理解度を測るため自己点検評価アンケートを実施しその分析を行った。本稿はその結果をまとめたものである。

Ⅱ. 研究の背景

1. 「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」の位置づけ

短期大学のDP一つに「社会に目を向け、多様な視点からものごとを考え、課題解決に向けて学び続けることができる。」を謳っている。その基礎となる力として「読む・書く」能力は必要不可欠な能力の一つである。

翻って本学の学生には必修科目として「セミナーⅠ」「セミナーⅡ」の2科目を2年次に配置し、シラバスの大部分を卒業論文（卒業研究をも含む）作成に充てている。高等教育を修了する目的の一つは、「答えのない問題を発見し、解決策を見つけ出す力」を修得し、その過程を文章化できる力を獲得することである。2年間の学びの集大成として卒業論文を作成することは学生にとっては時間的にも、能力的にもそれほど簡単なことではなく大きな負担ではあるが、修得した短大の学びを総合的に有機的に連携させ、卒業論文を完成させることは大きな自信になる。

しかし、セミナー担当の多くの教員から「学生の文章力は年々低下している感触がある」との声が寄せられている。就職活動に必要なエントリーシートを書くことが難しいのは、文章力、語彙力、漢字力の基礎的な知識が不足していることによるのではないと思われる。また、教科担当の教員からも課題のレポートが書けない学生が増えているとの声もあがっている。和田正法（2014）は作文教育について「レポート採点基準の開発と大学の一般教養科目で学生の文章力を向上させる取り組み」の中で、根本的な問題が3つあると述べている。その1つが、そもそも作文教育が未熟である。日本の教育システムでは、作文の教育がまったくなされていないというものである。そのため、大学の授業でレポート課題を出題しても、提出されるレポートは稚拙なものが多い。

本学の学生においても、文章が書けない要因は、漢字能力が不足している、語彙が不足している、話し言葉と書き言葉の区別ができない、文章の構成が理解できていない等がある。文章を書く機会が少なく、文を書く十分な教育を受けていないこと等により、文章を書くことに苦手意識を持っている学生が多い。

それらのことを受け、学生にまずは活字に接する機会を増やすことが第一歩と考えた。読書習慣をつけ、教養がつくことを目的として2016年度から本学では全学生を対象に「教養マラソン」を実施することとした。（「教養マラソン」とは1年間に読書感想文3冊以上、美術鑑賞、芸術鑑賞等を2件以上経験することで、学長表彰を行う。）1年目の結果はあまり芳しいものではなく、一部の学生が「教養マラソン」に参加するにとどまり、完走できた学生は数名

であった。

学生に文章力をつけるには、自主的な活動ではなく、基礎科目である「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」において強制的に学ぶことが必要であり、文章力を要請するシラバスに内容を変更することが必要であるとの結論に至った。

2. 科目「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」のシラバスの検討

本学の基礎教育科目として、「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」のシラバスは2009年度においては、科目担当者間の調整がされていない状況であり、「書きことば」の基礎知識を中心に構成されたもの、「話す・聴く」を中心に構成されたものなどがあり、また、「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」での担当者も様々であった。それらのことを踏まえ2014年度には全学科共通シラバスとし、文章表現の基礎を身につけ、実践的に文章作成を実施するシラバスに変更した。その後2016年度までの3年間は科目担当者は共通シラバスを用いて授業を実施した。共通シラバスでの実施ではあったが、担当者間の調整が難しく、担当者による内容のバラつきが大きく、残念ながら意図した目的に沿ったものとはならなかった。その原因の一つには担当者が非常勤教員であったことも大きいと考えられる。また、「日本語表現Ⅱ」におけるグループレポートの作成は、学生に興味を持たせ意欲を向上させる授業方法としては優れているものの、本学の学生においては文章作成能力に大きな差があり、多くの学生にとっては目的であるレポート作成の力がついたとは言えない結果であった。アンケート調査などは実施しなかったが、2年生の卒業論文の作成にその成果が表れず課題を残した。

Ⅱ. 「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」のシラバスの検討と作成

1. 「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」のシラバスの検討

確かな書く力を本学学生に習得させるためには、必修科目である「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」の内容の検討、また「ベーシックセミナー」との連携を図ることが重要であると考え、まず2016年に本学の「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」の学修目的と授業方法を見直すプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトメンバーは前述している。

プロジェクトの目的は、『実践的な学習を通して、「読む・書く」ことができるための基本的表現を身につけ、社会人として求められる文章力を養う』こととした。具体的には次の6つをその基本とした。

- (1) 本学の共通シラバスとし、科目担当者間のバラツキをなくすために教師用のマニュアル作成も含む。
- (2) 文章作成を段階的に無理なく習得できるようにする。
- (3) 「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を学習後には、「読む力」においては新聞の社説を読み要約でき、「書く力」においては本学の基礎教育科目、専門科目の科目における課題レポートが作成できることを目標とする。

- (4) 学生が興味を持って積極的に学修に取り組める工夫をする。
- (5) 関連科目として、特に内容的に関係が深い「情報活用演習」、「ビジネス文書実務」「ベーシックセミナー」との内容の連携を検討する。
- (6) 語彙、ことわざ、漢字に関しては「日本語検定」を活用し、基本的には学生の自主学習とし、学習の計画については教科担任がサポートする。

2. 「日本語表現Ⅰ」のシラバスの要点

「授業のねらい」としては「実践的な学習を通して、「読む・書く」ことができるための基本的表現力を身につけ、社会人として求められる文章力を養う」とした。

学習目標は2つとし、①高等教育での基礎となる言語運用能力を身につける②小論文が書けるとした。毎回、事前学習・事後学習を課し、書くこと、読むことを習慣化できるような仕組みを作った。

第1回は文章を書く目的、読む目的について十分に理解させ、15回の学びを自律的、自主的に学習する姿勢を作る。

第2回～第4回は文章の基本的理解の復習にあて、実際の文章の大意をつかむことができる。

ここではコラムや社説などを題材にし、学生に文章の構成を意識させ、文章はどのように構成されているのかを文章を読むことにより実践的に理解させる。題材の選択は重要であり、学生の興味を抱かせるもの、タイムリーなものにするなどに注力する。

第5回～第7回は文章の構成、文章の要約のしかたを学び実際の要約の記述を学ぶ。

3回にわたって理解した文章の構成を基本に文章の要約を演習する。文学的な文章ではなく論理的に組み立てられている文章の構成を要約する力をつけることにより文章作成に必要な能力を習得することを目指す。

第8回、第9回は短い意見文（400字程度）の作成ができる。

文章の構成を理解し要約の方法を習得した技術を応用し、意見文を作成することに挑戦する。

コラムや社説などを選び、それに対する自分の意見を組み立て、文章にする。題材の文章を要約し、それに対し、賛同する部分、反論する部分を仕分けて自分の考えを整理し、文章の骨格を作成する。

要約すなわち概要を作成し、その概要を展開していく。

第10回～第12回は意見文を作成し、他者の作成した意見文の批評ができる。

意見文を作成し、他者の作成した分を批評することにより獲得した力を発揮することでより深めることを目的とした。

第13回、第14回はインタビュー記事の作成とし、インタビュー内容の作成、アポイントを取り、実際にインタビューを実施し、文章にまとめる。

第15回は学んだ事を振り返り、十分に復習する。

その他、毎回、日本語検定の学習状況をチェックし、学生各自の学習を促すようにする。

11月に実施される日本語検定試験の2級、3級のいずれかを受験する。(級の選択は学生自身に任せる)

日本語表現Ⅰ シラバス

科目名	日本語表現Ⅰ <small>(★お氣に入りに)</small>		
担当教員名	全担当者共通		
学部・学科	短期大学部(生活科学科)	単位	2単位
開講学期	春期	曜日時限	火曜日 第3時限
		学年	1

<p>● 授業のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践的な学習を通して、「読む・書く」ことができるための基本的表現力を身につけ、社会人として求められる文章力を養う。 ・基礎的知識として、日本語力や漢字能力を培う。
<p>● 学生の学習目標</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 高等教育での基礎となる言語運用能力を身につける。 ② 小論文が書ける。
<p>● 授業内容(スケジュール)</p> <p>第1回 ガイダンス 授業の進め方や評価の方法について理解する。文章を書く目的、正確に読むことについて理解する。</p> <p>第2回 文章表現・表記のルールを学ぶⅠ レポートとはどのような文章か、文体、文字の使い分けを理解する。</p> <p>第3回 文章表現・表記のルールを学ぶⅡ 適切な日本語を使うことを理解する。</p> <p>第4回 文章を正確に読む。 文章の読み方を学ぶ。文章を正確につかみ、大意を理解する。</p> <p>第5回 文章を要約するⅠ 文章を適切な時間に読める。文章の大意をつかみ、要約ができる。</p> <p>第6回 文章を要約するⅡ 長文の要約ができる。</p> <p>第7回 文の仕組み、構成を学ぶ。 文章の基本構成を学ぶ。</p> <p>第8回 意見文の作成Ⅰ 意見文とはどのようなものが構成を理解する。意見文を作成する。</p> <p>第9回 意見文の作成Ⅱ 意見文の構成要素を踏まえて、適切な読み手に伝わる意見文を書く。</p> <p>第10回 説明文を作成するⅠ 説明文とはどのような文章か、説明文の書き方を理解し、簡単な説明文を作成する。</p> <p>第11回 説明文を作成するⅡ テーマを決め、説明文の作成をする。</p> <p>第12回 説明文の紹介・批評 作成した説明文を発表し、批評する。</p> <p>第13回 インタビュー記事を書くⅠ インタビューに基づき記事を作成する。</p> <p>第14回 インタビュー記事を書くⅡ 社会人へのインタビューに基づき記事を作成する。</p> <p>第15回 まとめ 学んだ事を振り返り、まとめる。</p>

Ⅲ. 調査方法

1. アンケートの実施

日本語表現Ⅰを履修後の2018年7月、2019年7月の2回にわたり受講者全員に日本語表現Ⅰについてのアンケートを実施した。

(1) 2018年度、2019年度におけるアンケートの実施と集計結果

実施対象者：日本語表現Ⅰの受講者 225名（再履修学生を除く）

実施時期：2018年7月末、2019年度7月末

質問紙の構成：日本語表現Ⅰのシラバスの学習に基づき質問項目 12問

評価方法：5段階評価 5に近いほど習熟度が高いことを示す。

以下に2018年度、2019年度のアンケート集計結果を示す。

表1 2018年度日本語表現アンケート集計結果

学科名	全体数	回答数	回答率
生活科学科	80	72	90%
ビジネス社会学科	87	77	89%
製菓学科	58	57	98%

表2 2018年度日本語表現アンケート項目別評価

	文章を書く目的を理解している	文章を書くときに、適切なことばを使うことができる	文章を正確に読み、理解することができる	文章を要約することができる	文章の基本構成がわかる	意見文、説明文の区別ができる	意見文を作成できる	説明文を作成できる	インタビューに基づき記事を書ける	漢字に興味をもった	文章を書くことの重要性がわかった	800字程度(400字原稿用紙2枚)のコラムの要約ができる
全体の平均	3.7	3.6	3.5	3.1	3.4	3.7	3.2	3.2	3.4	3.4	3.8	2.8
生活平均	3.8	3.6	3.5	3.0	3.4	4.1	3.2	3.1	3.1	3.3	3.8	2.8
ビジネス平均	3.7	3.8	3.7	3.4	3.5	3.8	3.5	3.7	3.9	3.5	3.9	3.0
製菓平均	3.6	3.3	3.2	2.9	3.2	3.2	3.0	2.9	3.2	3.4	3.6	2.7

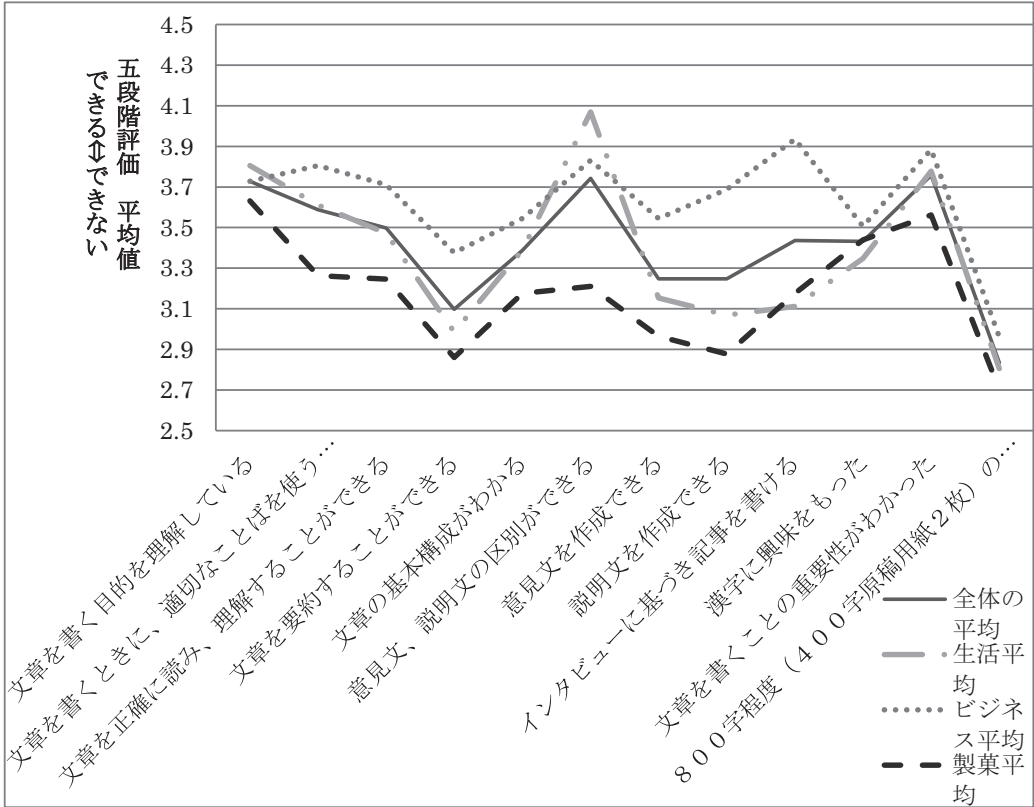


表3 2018年度日本語表現アンケート結果の分析(項目ごとの分析)

全学科項目ごとの相関											
文章を書く目的を理解している	文章を書くときに、適切なことばを使うことができる	文章を正確に読み、理解することができる	文章を要約することができる	文章の基本構成がわかる	意見文、説明文の区別ができる	意見文を作成できる	説明文を作成できる	インタビューに基づき記事を書ける	漢字に興味をもった	文章を書くことの重要性がわかった	800字程度(400字原稿用紙2枚)の文章が書ける
1											
0.492311499	1										
0.533845548	0.638398444	1									
0.495646802	0.607438078	0.729380966	1								
0.57092826	0.665191443	0.646598818	0.612332137	1							
0.488799298	0.587266547	0.585760887	0.544000247	0.677959336	1						
0.475193181	0.597444947	0.562027674	0.584842631	0.629113719	0.698576676	1					
0.487851245	0.623352576	0.595486042	0.599929133	0.632588766	0.745868875	0.817329666	1				
0.519234459	0.513152841	0.601234174	0.571572591	0.549875076	0.583607513	0.67353388	0.716737283	1			
0.307959972	0.264026596	0.280604751	0.225065323	0.387319523	0.314708783	0.329934167	0.310176349	0.347739712	1		
0.617237083	0.436620874	0.448426638	0.411986101	0.662749922	0.563965786	0.494016916	0.494398013	0.478606682	0.41197358	1	
0.530171373	0.519955558	0.496588743	0.62800196	0.803868027	0.467183046	0.557875084	0.521730808	0.556493194	0.303195927	0.521897621	1

表 4 2019年度日本語表現アンケート集計結果

学科名	全体数	回答数	回答率
ビジネス社会学科	63	63	100%
製菓学科	72	72	100%

表 5 2019年度日本語表現アンケート項目別評価

学科	文章を書く目的を理解している	文章を書くときに、適切なことばを使うことができる	文章を正確に読み、理解することができる	文章を要約することができる	文章の基本構成がわかる	意見文、説明文の区別ができる	意見文を作成できる	説明文を作成できる	インタビューに基づき記事を書ける	漢字能力に自信がある	文章を書くことは得意である	800字程度(400字原稿用紙2枚)のコラムの要約ができる
全体の平均	3.3	3.1	3.3	2.7	3.1	3.4	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.2
製菓の平均	3.5	3.3	3.4	2.8	3.2	3.4	2.9	2.7	2.8	2.6	2.5	2.5
ビジネスの平均	3.1	3.0	3.1	2.6	2.9	3.3	2.4	2.4	2.5	2.6	2.5	2.0

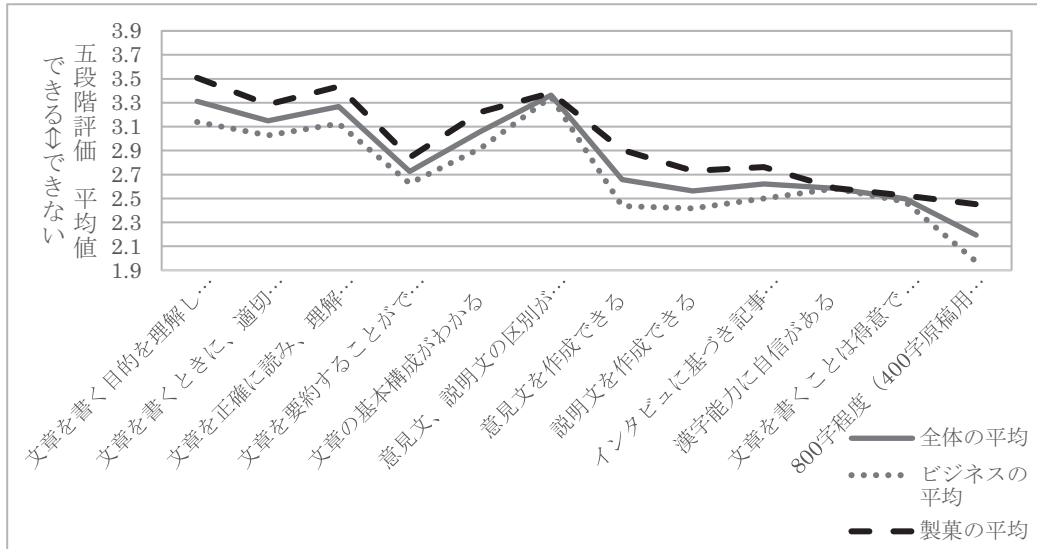


表 6 2019年度日本語表現アンケート項目別評価

	全学科項目ごとの相関											
	文章を書く目的を理解している	文章を書くときに、適切なことばを使うことができる	文章を正確に読み、理解することができる	文章を要約することができる	文章の基本構成がわかる	意見文、説明文の区別ができる	意見文を作成できる	説明文を作成できる	インタビューに基づき記事を書ける	漢字能力に自信がある	文章を書くことは得意である	800字程度(400字原稿用紙2枚)の...
文章を書く目的を理解している	1											
文章を書くときに、適切なことばを使うことができる	0.340158413	1										
文章を正確に読み、理解することができる	0.343720028	0.596327141	1									
文章を要約することができる	0.301301501	0.548940543	0.623714137	1								
文章の基本構成がわかる	0.372161916	0.535617367	0.525189872	0.445575579	1							
意見文、説明文の区別ができる	0.250705498	0.433903276	0.453998962	0.411013222	0.566820483	1						
意見文を作成できる	0.215107745	0.480126283	0.474700847	0.466412499	0.573667474	0.566313183	1					
説明文を作成できる	0.312718334	0.549005892	0.444882592	0.507428468	0.458297114	0.567682337	0.717533827	1				
インタビューに基づき記事を書ける	0.275233702	0.510789928	0.468877016	0.499465975	0.47445933	0.454872874	0.688925557	0.708121797	1			
漢字能力に自信がある	0.106763906	0.215023276	0.17797432	0.149085123	0.225826925	0.032686846	0.105898597	0.086738074	0.088814271	1		
文章を書くことは得意である	0.155888567	0.513182843	0.396285051	0.345561961	0.410825028	0.365642355	0.45380547	0.50270616	0.554104393	0.232230201	1	

2. アンケート結果と考察

アンケートの質問は12項目でシラバスにそった内容とした。質問の内容は、理解度に関する項目を5つ、「文章を書く目的を理解している」「文章を正確に読み、理解することができる」「文章の基本構成がわかる」「意見文、説明文の区別ができる」「文章を書くことの重要性がわかった」、技術習得に関する項目を7つ「文章を書くときに適切なことばを使うことができる」「文章を書くときに、適切なことばを使うことができる」「文章を要約することができる」「意見文を作成できる」「説明文を作成できる」「インタビューに基づき記事を書ける」「800字程度のコラムの要約ができる」で構成した。

(1) 2018年度のアンケート結果と考察

3学科ともグラフは同じような形であり、各項目の値はビジネス社会学科の平均値が最も高く、製菓学科の平均値が最も低い結果である。これは学生の自己評価であるため、自己の到達度を高く持つ学生であれば数値が低く、低い学生であれば高くなることも考えられるため客観性には乏しい。

全学科に関しての理解度に関する項目については、高評価の順では「文章を書くことの重要性がわかった」(3.8)が最も高評価であり、「文章を書く目的を理解している」(3.7)「文章を正確に読み、理解することができる」(3.5)「意見文、説明文の区別ができる」(3.5)「文章の基本構成がわかる」(3.4)と続く。技術習得に関する項目では、「文章を書くときに、適切な言葉を使うことができる」(3.6)「意見文、説明文の区別ができる」(3.5)「インタビューに基づき記事を書ける」(3.4)「説明文を作成できる」(3.2)「意見文を作成できる」(3.2)「文章を要約することができる」(3.1)「800字程度のコラムの要約ができる」(2.8)である。シラバス作成の意図した結果と異なったのは文章の作成より要約の評価が低いことである。「800字程度のコラムの要約ができる」の質問では3.0を下回る2.8の結果であり、学生にとっては難しいと感じていることがわかる。このことは3学科とも同じ結果である。ビジネス社会学科が各項目で良い評価を得ているが、他学科と異なり学科教員が指導していることとの関連性も影響していると考えられる。あるいは、自己評価が高い傾向があるのかもしれない。このことに関しての理由は不明である。

12項目について各項目の相関を調べた結果、以下のことがわかった。

- ・文章を正確に読み理解できる学生は、文章を要約できる。
- ・意見文・説明文の区別がつく学生は意見文、説明文を作成でき、意見文を作成できる学生は説明文を作成することができ、その逆も言える。また、説明文、意見文を作成できる学生は「インタビューを基に記事を書くことができる」項目の値が高いが、「説明文を作成すること」と「インタビューをもとに記事を書くことができる」の相関がより高い。

すなわち、説明文が書けることが重要であると言える。説明文を書くには、理解力、論理的思考、筋道だった説明、明確な語彙力・文章力が必要であるためと考えられる。

学生アンケート集計結果からは、学生の新シラバスの授業の結果、文章を書く目的や重要性への理解を得ることができた。旧シラバスでの検証は行っていないため比較はできない。

「日本語表現」の学習目標を短期大学部ではコミュニケーションの4つの能力から、読む・書く能力に絞り込んだ。また、シラバスでは各回の学習を細かく目標設定（目的）を明確にした。これにより、学生にとってはより強く学習目的を意識した受講となったと考えられる。

「日本語表現」の新シラバスは、学生の満足度、習熟度が高い授業の実施ができたと言える。

（2）2019年度のアンケート結果と考察

2019年度の対象学科はビジネス社会学科と製菓学科の2学科である。アンケート項目のうち、10項目は同じ項目、2項目を変更した。変更した項目の2項目の評価は「漢字に興味を持った」（3.4：2018年度）→「漢字能力に自信がある」（2.8:2019年度）、「文章を書くことの重要性がわかった」（3.8：2018年度）→「文章を書くことは得意である」（2.5：2019年度）の結果となった。予想できた結果ではあったが、漢字に興味は持ったが漢字能力に自信がつかずほどまではいかなかった、また文章を書くことの重要性がわかるが、得意とまでは言えないとの結果になり、質問項目を変更したことには問題があったとも考えられる。その他の結果は2学科とも質問項目の評価はほぼ同じであり、製菓学科の学生の評価がビジネス社会学科よりやや高い結果であるが、あまり大きな差はない。評価の差が最も大きい項目は「800字程度のコラムの要約ができる」ビジネス社会学科（2.0）製菓学科（2.5）で0.5ポイントの差が認められる。しかし、評価の平均値は3.0であり、2学科ともに評価は低い。2学科の12項目の評価の平均は2.85、製菓学科:2.96、ビジネス社会学科：2.71と低い評価にとどまった。先に述べたが、2018年度と2019年度のアンケート項目で変更した2項目の評価を除いても全体的に低い評価である。この評価は「日本語表現Ⅰ」を受講しての学生の自己評価であり、客観的な受講後の能力測定ではない。

項目別の高い項目は「意見文、説明文の区別ができる」（3.4）「文章を書く目的を理解している」（3.3）「文章を正確に読み理解することができる」（3.3）「文章を書くときに適切なことばを使うことができる」（3.1）「文章の基本構成がわかる」（3.1）と続き、その他の項目は3.0以下である。

最も評価が低い項目は「800字程度のコラムの要約ができる」（2.2）である。

12項目について各項目の相関を調べた結果は特筆すべきものはなく、インタビューに基づいた記事が書ける学生が意見文。説明文を作できる、説明文を作成できる学生が意見文を作成できることが言える程度である。

（3）2018年度、2019年度2年間のアンケート結果からの考察

2年間のアンケートの結果から得られたことを次に示す。

1. 項目の評価の高低はあるが、グラフの形はほぼ同じである。（漢字に関する項目、文章

- を書くことに関する項目を除く)
2. 理解に関する項目（5つ）の評価は高く、技術習得に関する項目（7つ）の評価は低い。
 3. 「文章を書く目的を理解した」項目の評価は高い。日本語表現の科目においての最も重要な事柄であり、この項目が2年間とも高かったことは評価に値する。
 4. 技術習得に関する項目の評価は低く、2年共に「800字程度のコラムの要約ができる」の評価は最も低く、また「文章を要約することができる」の評価も低い。
 5. 項目の相関から説明文の作成、意見文の作成に高評価をつけている学生は文章の要約ができる結果が得られた。

前述したが、評価値は学生の自己点検によるものであり、客観的な評価ではなく、日本語表現に関する能力がついたかどうかはこのアンケートでは結論付けることはできない。

日本語力を計るすべとして、2018年度、2019年度の2年間は「日本語表現Ⅰ、Ⅱ」履修者（必修科目）には日本語検定試験受験を推奨した。該当するレベルは2級又は3級とし、受験するレベルは学生の自己選択とした。

2018年度は受験が徹底できない学科もあったが、2級受験者:87名、3級受験者:62名であった。2級合格者はなし、準2級合格者（2級受験者のうち準2級相当と認められた者）7名、3級合格者:13名であった。2019年度は2級受験者:48名、合格者:準2級合格:1名、3級受験者:58名、合格者45名であった。

2018年度に2級も受験者が3級受験者に比べて多かったのは2級合格者には資格取得奨励金が授与されるためかと考えられ、2019年度には3級合格者にもそれ相当の奨励金を授与することにした結果、学生は3級の受験を選択するものも増えたと科目担当者は述べている。2年間で受験者数が異なるが、2級の合格者はなく準2級合格者は7名から1名と減少し、3級においては2018年度の合格者は13名、2019年度は45名と大幅に増加した。その合格率は77.6%と高く、一定の効果があつたと言える。日本語検定試験は1級から7級まであり、6分野（敬語、文法、語彙、言葉の意味、表記、漢字）の日本語力を総合的に計る検定試験である。本学の日本語表現Ⅰ、Ⅱで扱うのは主に6分野の応用的な事柄であり、日本語検定試験の内容に一致しているとは言い難い。総合的な能力を図るメルクマールに使用していたが、今後は本学独自の試験を作成することも検討する必要があるだろう。

3. 今後の課題

2年間の学生自己評価アンケートからの考察を述べたが、「日本語表現Ⅰ、Ⅱ」の短期大学部基礎教育科目における新しいシラバスの今後の課題について述べたい。

まず、日本語表現の授業担当者を当該学科の教員が担当できることを目指し、授業の教師用マニュアルも作成し、基本的な事柄の教員間での共通認識での授業展開の計画であったが、現在はビジネス社会学科においてのみの実施にとどまった。製菓学科は専任教員の持ちコマ数の関係上、非常勤教員が担当し、また歯科衛生学科は新設学科であることの縛りがあり他学科専

任教員の兼担とせざるを得ない状況である。ベーシックセミナー、卒業論文の作成、その他の関連科目との関係上からも学科専任教員が担当することが望ましいと考える。

成果と言えることは学生の「日本語表現」に関する意識を植え付けられた点にあるのは、アンケート項目の「文章を書く目的を理解している」「文章を正確に読み、理解することができる」の項目の自己評価が2年間のアンケート結果が示している。理解に関する項目に関しては技術習得に関する項目より高評価であった。すなわち技術習得に関する項目は残念ながら低評価であり、文章を要約することに関しては評価が低く、要約する力はないことを示唆している。原因については学生にヒアリングをする必要があるが、恐らく授業時間内だけでは習得することができないであろうと推察する。授業担当者は課題等で補足を試みてはいるが、学生の積極的な学習意欲がなければ身につかない力でもある。本学では「教養マラソン」(1年間に書籍を読み感想文を作成する。芸術等の鑑賞でのレポートを作成する。)を実施しているが完走する学生は1年間に数人であり、読書の習慣をつけることに苦慮している。技術習得の項は内容を厳選し、2020年度のシラバスにおいては各項目に2回分の授業時間を確保するように修正を加えた。

文章を読み、要約する力、レポートを作成する力は社会人として仕事をする場面において、重要な力の一つである。この力をつけるきっかけとしての日本語表現力(特に読む・書く力)を確実に習得させるための方策を検討し、実施していきたいと考える。また、「日本語表現Ⅱ」の授業に関しては「日本語表現Ⅰ」の展開と位置付けているが、基礎的な部分を核に「日本語表現Ⅰ、Ⅱ」を通して基礎力の習得を目標にしたシラバス構築を検討することも一案であろう。現状では、関連科目との連携も十分には計られていない。今後関連科目のシラバスと十分な連携を図り、学生が実際に文の作成に時間を充てる学習スタイルを確立することも検討する必要があると考える。

コロナ禍にある現在では対面での意思疎通は難しく、画面を通してのコミュニケーション、メールや文書を介してのやり取りが主となっている。アフターコロナの社会では、以前の対面を主としたコミュニケーションの社会にはなかなか戻らず、コミュニケーションの形は新しくならざるを得ないと多くの専門家は述べている。それがどのようなものであるかは不明な部分が多いが、コミュニケーションの方法には文字や図表・絵などを介したものが増えると推察される。今後の社会においてはより一層、文章を正確に書き、正確に読み取る能力は不可欠なものになると思われる。また、急速な通信手段の発達により、世界が狭くなり、外国人とのやり取りが急速に増えるであろう。語学力が必要なことは言うまでもないが、翻訳機能の発展により瞬時に外国語が本国語に変換され、誰でもが外国人と遠隔で話をする機会が増える。そのような社会においては正確な日本語を書き、読み、話し、聞く力を養うことはより一層重要な課題となる。

【注】

- 1) 油谷純子、先川直子、常松玲子、神山直子

【参考文献】

- 1) 石塚正英・黒木朋興「アカデミック・ライティングのための基礎トレーニング」朝倉書店、2016
- 2) 木村美幸「語彙の理解を深める効果的な教育とは：国語教育への提言」杏林大学外国語学部紀要、2019
- 3) 三村善美・牛島倫子他「パソコン活用による日本語コミュニケーション実践ノート」風間書店、2006
- 4) 油谷純子他「『書く・話す』能力の教育方法」～社会人基礎力を中心として～ 日本ビジネス実務学会近畿ブロック教育技法受託研究、2010
- 5) 安部朋世・福嶋健伸・橋本修編著「大学生のための日本語表現トレーニング ドリル編」三省堂、2010
- 6) 速見博司「文章表現入門」蒼丘書林、2008
- 7) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、2012
- 8) 中央教育審議会答申「学士課程答申」、2010
- 9) 和田正法「小論文でレポート・論文の基礎力をつける」Amazon Kindle版で頒布、2014
- 10) 土部弘・早川勝廣・井上一郎「文章表現力の構造（第1報）」大阪教育大学紀要、1978
- 11) 和田正法「レポート採点基準の開発と大学の一般教養科目で学生の文章力を向上させる取り組み」三重大学教養科目教育機構、2016